

大秦景教流行中国碑 現代訳

大秦寺の僧侶、景浄の記述。

一、景教の信仰告白

万物の何ひとつなき先に存在し、はじめなく、終わりなき方、とこしえまでも存在する元尊(神)、この方は、真理をもって造化(創造)し、多くの預言者たちを遣わされた。

この方こそ、私たちが信じ告白する三位一体神の妙身(御父)、始めなき、まことの主、阿羅訶(アロハ。シリア語で神)である。

この方は、十字を分けて四方を定め、元風(聖霊)の働きを通し、光と闇、陰と陽をお造りになった。無から天地を創造し、日と月を造って昼夜を分けられた。

万物をたくみに創造し、初人(アダム)をお造りになった。また彼に良和(エバ)を賜い、ともに万物を支配させなされた。

人はもともと、その本性は悪に傾かず、その純真な心は地のものを乞い願わなかったのだが、裊殫(サタン)が来て、虚偽をもって彼らを惑わした。

また神と人とを隔てさせ、人の心を邪悪なものとなした。こうして 365 種(人類)はサタンに従い、好き勝手に生きるようになった。

人は競って世に掟を作り、あるいは物質を追い求めて現世利益の宗教に走る。あるいは哲学を弄し、あるいは儀式を通して幸福を追い求める。

あるいは善行して、自分を善人と傲る。知恵は利を追求するが、心は闇の中にあり、前途は暗い。迷うばかりで、立ち返る道は久しくわからなかった。

しかし、私たちが信じ告白する三位一体神の分身、景尊・弥施訶(景教の尊主メシア)は、真の姿を隠し、人として現れてくださった。そのとき天使は喜んだ。

大秦(ローマ帝国シリア領)において、聖なるメシアは室女(処女マリア)を通して降誕された。星も喜びを告げ、ペルシアからは星の輝きを見て宝物を捧げに来るものもいたほどであった。

メシアは『旧約聖書』24 卷(景教の『旧約聖書』はユダヤ教と同じく 24 卷)を成就し、世界を御手の中に治められた。

また、私たちが信じ告白する三位一体神の浄風(聖霊)は、無言の新しい教えにより、良用(信者)を正しい信仰へと導かれる。世界を救い、塵を練って真を成される。

信・望・愛の心を開き、生を与えて人を死から解放される。景日(主の日、主の復活の日)を掲げ、暗府(よみ)を破り、悪魔をくじかれる。

恵みの船に私たちを乗せ、天の宮に上らせられる。こうして人は救われ、神のみわざは成った。まさに太陽が真上にのぼりつめた有り様である。

私たちは『新約聖書』27 巻を持っている。三位一体神の創造の力は、霊の関を開かれる。その御教え、洗礼、聖霊は虚飾にみちた人の心を洗い清める。

私たちは印に十字架を持つ。世と和解し、自由の中に生きる。木を打ち鳴らして愛と恵みを人々に知らせ、東方に礼をして日出ずる道をたどる。

髭のあるのは心を外に向けたしるし、一方、頭の頂の毛をそるのは、心に悪意のないしるしである。

私たちは奴隷をもたず、貴賤の別を設けず、財産を蓄えず、身もとに残すものもない。

清めは思慮深い心で行い、戒律は謹んで堅く守る。日に 7 度の礼拝を捧げ、生者と死者のために祈る。とくに 7 日に 1 度の主日礼拝には、心を洗い清め、原点に立ち返る。

真理の道は不思議で名づけられないが、功德は明らかである。それを強いて名づけるなら景教という。

景教の真理は、聖でなければ広まらない。聖は真理でなければ広まらない。聖と真理とは、ふたつに割った契約の札のように相符合して働く。その天下にこそ真の文明が生まれる。

二、唐の歴代皇帝と景教

さて、唐の太宗文皇帝（唐第 2 代皇帝。在位 626～649 年）は、偉大な力をもって世を治め、明聖にして人に望んでいた。

一方、大秦国には、優れた宣教師・阿羅本（アブラハム）がいたが、彼はこの情勢を聞き及んだ。彼は聖書などを携え、長旅の困難にも耐えて貞観 9（635）年のよき時期に、長安（現在の西安）にまでやってきた。

太宗皇帝は、一行を迎えるため、総理大臣の房玄齡により儀仗兵を出した。そして彼らを、宮に案内して通した。書殿にて聖書その他を翻訳させ、自ら教えを宮中で問い、正しく真理を深めた。

皇帝は特別に伝道を命じ、貞観 12（638）年の秋 7 月、詔を発していった。

「その真理は計り知れず、その聖なるは極めがたい。ゆえに多くの民衆に教えを説き、民衆を救え。大秦国の優れた宣教師・阿羅本は、遠方より聖書や像（おそらくイコン）を携え、郡に上って献上したが、その教えは奥深く、幅広い。教えの根本を見れば、その発生と成り立ちは優れている。説教には複雑さはなく、理に走らず賜物を活用し、人に益を与える。よろしく天下に教えを宣べ伝えよ」

それで役人は、京の義寧坊に大秦寺（キリスト教会）1 か所を建設。景教僧たち 21 人を迎えた。宗家の徳が失われたとき、こうして青鸞は西に昇り、巨唐の道は光り、景教の嵐は東へ吹いた。

役人らは大秦寺の壁に、皇帝の肖像画を模写した。その姿は麗しく、その徳は世界に輝いた。

『西域図記』や漢巍の歴史書に出る大秦国は、南には珊瑚の海あり、北には多くの山あり、西には仙境の花林あり、東には大河が流れる。国土には石綿、返魂香（はんごんこう＝人を生き返らせる香）、明月珠（めいげっしゅ＝月の明かりを出す玉）、夜光壁（やこうへき＝闇を照らし出す玉）などが出土する。

一般に盗難もなく、平和で安楽な国である。法律は景教にのっとり、徳のない者は皇帝として立てられない。国家は潤い、文明は栄えている。

つぎに高宗大帝（在位 649～683 年）の時代に、皇帝はうやうやしく皇祖の意志を継いだ。真宗（景教）を敬い、広めた。中国の諸州に景教の寺を置き、その鎮国大法主（景教会の長）に阿羅本をすえた。

福音は国の 10 区画（627 年以後、国は 10 区画に分かれていた）に流れ、祝福が国に満ちた。景教の寺はすべての都市にあり、各家庭に景教の祝福（景福）があふれた。

しかし、則天武後の聖暦年に、景教は東周の地で仏教徒らから悪口を受けた。先天の時代（712 年からの玄宗の時代）の末には、一般庶民から大笑いされ、長安でも非難を受けた。

そのとき僧首羅含（ラーシュン）、大徳及烈（ガブリエル、もしくはグラークか）、ならびに西方に住む景教貴族、また世事から離れた景教指導者たちは、ともに御教えの実践を説き、信仰の復興に尽力した。

つぎに玄宗至道皇帝（在位 712 年～756 年）は、寧国など 5 か国の王に協力を求め、福音堂の祭壇を建立した。こうして伝道活動は再び活気を取り戻し、土台は強められた。

天宝初年（742）、大將軍・高力士が皇帝から派遣され、寺に 5 聖人（唐の 5 皇帝か）の肖像写真を安置した。また絹百匹、皇帝の計画図を賜った。

皇帝の姿は遠くてよく見えなかったが、その近くに見える警護兵たちは彼が皇帝である証、皇帝の光輝あるお顔は身近となった。

天宝 3（744）年には、大秦国の僧・佶和（ギワルギス）が星を見、伝道のために日出ずる方角へ向かい、来唐した。皇帝は、僧・羅含や僧・普論（パウロ）ら 17 に詔して、大徳佶和とともに興慶宮殿で功德を修めた。

また皇帝自身が、寺の額に竜書してくださった。その赤くかすんだ筆跡は宝石が光るかのようであり、大空における太陽の輝きを凌ぐほどに思えた。

皇帝から賜ったものは、険しい長安南山のように高く、あるいは水が流れ行く東海のように深かった。聖にして、あらゆるものを賜り、あらゆることを成してくださった。

成されたことをさらに述べよう。肅宗文明皇帝（在位 756～762 年）の時代には、靈武などと同じように五郡にも、重ねて景教寺院を建ててくださった。

信徒の善行の扶助により祝福が開かれ、大きな喜びの中に皇帝の事業が進んだ。

また代宗文武皇帝（在位 762～779 年）は、帝国の発展に無為に従事した。皇帝誕生日にはお香を賜り、成功を告げ、信徒たちにはたくさんの食物をお分かちくださった。

皇帝の徳行は広く、民を生かした。皇帝は景教の教えに信頼し、民はよく養いを受けた。

わが建中聖神文武徳宗皇帝（在位 779～805 年）は、8 つの政策を行った。愚者は免職とされ、賢者は功績を認められて昇進した。

治安のために 9 種の法が設けられた。景教的使命に立って改革を実行した。景教の教えをよく体得し、その祈る心には偽りがなかった。

三、景教徒・伊斯(イサク)の功績

国が偉大で謙虚、平和であわれみ深く、慈しみを広め、民衆を苦しみから救い、善を施して助けることが、私たちの徳目の大きな目標である。また私たちが徐々に成長している証でもある。

苦難の嵐がやって来たとき、天下がよく鎮まり、人々が治まり、物は清く、生者は繁栄し、死者は楽しみ、そこに饗応の念が生じ、誠の情が生まれるなら、それは我らの景教の力が現れた成果である。

景教僧・伊斯は、施しの徳に高く、大施主と呼ばれた。彼は官吏、また副使節で、宮廷に使えていたが、紫の袈裟（位が高いしるし）を賜った。

穏和にして恵みに富み、福音を聞いては徳行に努めた。遠くバルクの地（王舎城。古代インドのマガダ国の首都）より、ついに唐に来た人で、武術は 3 代に高く、芸能は非常に優れていた。

宮廷に仕えたとき、彼の名は皇帝の王帳に記された。中書令汾陽郡王の郭公子儀（697～781 年）が初めて戎族を朔地域に平定したとき、彼は肅宗皇帝の命令により、その戦いに従軍した。

皇帝の寝室に出入りできる親しさにありながら、彼は自分を偉いとは考えなかった。かえって上司を護衛する牙となり、また軍隊を整える目・耳となって仕えた。

お金や物品をむだに使わず、家にも貯めなかった。皇帝から下賜されたガラスの器も景教寺院に献品し、また軍を退くときに下賜された金の絨毯も、会堂に敷いた。

会堂が古くなれば修復し、広くし、寺院の壮麗さはキジが飛び立つ姿にも似ていた。伝道に尽くし、愛をもって自分の富を捧げた。

毎年、4 つの寺の景教僧や信徒たちを集めては、50 日間にわたって聖会を開き、もてなしをした。備えた品を、飢えた人が来たときの食事として与え、あるいは服のない人が来たときの衣服として与えた。

病人が来れば医療を施して元気にし、死んだ人があれば葬って慰めた。清廉な達婆（ペルシア語のタルサ＝キリスト者）の中でも、彼ほどの者は聞いたことがない。

白衣の信者だった彼のうちに、真の景教徒の姿を見る。この碑に彼の名を刻んで、その勲功を称える。

四、頌栄

神に誉れがあるように。

まことの主は、始めなく、とこしえまでも変わることがない。万物を創造し、地を起こし、天を立てられた。

世に來られた御子イエス（分身）の救いは限りない。日は昇り、すべては、まことの主のみわざを証している。

偉大な文皇・太宗皇帝は、景教を知ることにおいて、前の皇帝より優れていた。争乱を静め、天下は太平となった。

光に満ちたる景教は、私たちの唐に伝えられた。經典は訳され、景教の寺が建った。正者も死者も、福音の船に乗って（御国に）向かった。

多くの祝福が人とともにあり、国は安泰となった。

高宗皇帝は、父の遺志を継ぎ、景教の精舎を建てた。広くて明るい礼拝堂が中国全土に満ちた。真の道を宣べ伝え、景教指導者を任命した。人には楽しみと安きがあり、物には災難がなかった。

玄宗皇帝は、聖教を悟り、景教の真理をよく修めた。自筆の額は輝き、映えている。その肖像画は玉のように光り、人々の尊敬を集めている。その業績は多く、全土にあり、民はその慶びにひたっている。

肅宗皇帝が帝位につくと、その輝きは太陽の光を凌ぐと思えるほどであった。またその幸いな威風が、闇を吹き払った。

幸福が皇室に宿り、災いは長く遠ざかった。争いはやみ、土台が確立し、我らが唐の国は堅く立った。

代宗皇帝は、孝にして義、その徳は天地に合致していた。善を施すに惜しみなく、人を生かした。物質も豊かに整えられた。

香を下賜して、民の功績に報い、愛をもって施しをした。そのために東の国々からも、西の国々からも、多くの人が集まってきた。

建中徳宗皇帝は、巨大な世界に君臨し、明德を修めた。その武術は国の隅々まで静め、その武芸は国の隅々まで清くした。

その光は人の隠れた所にまで及び、その繁栄は鏡にも写った。天地四方は明るく生氣を取り戻し、外国の部族たちもその政治を模範とした。

福音は拡大し、至る所に祝福があった。すべては三位一体の神の恵みである。主は何事でも成してくださった。しもべはそれを記述し、ここに碑を立て、その大いなる御恵みを讃える。

大唐建中（781）年、西1月7日の日曜主日に、この碑を建立。時の法主は、景教僧・寧恕（在位774～778年）。彼は東方景教信者の主管者（総主教）である。

朝儀郎前行台司士参軍の呂秀巖の書による。また、検査官、試太常卿で、紫の袈裟を賜った景教寺の主僧・業利（ガブリエル）が検閲した。碑を建立したのは、検査官であり景教僧の行通、および景教僧・靈寶である。